「シンデレラに関する相談事」

　俺はシンデレラが嫌いだ。

　嫌いと言っても、所詮は子供向けのお伽噺。内容がどうとか、そういうケチを付けたい訳じゃない。それに嫌いというよりも、トラウマといった方がしっくり来るかもな。

　俺にとって、シンデレラというワードは今になっても忘れられないトラウマの一つだ。

　遡って、確か五年くらい前か？

　当時の俺は親元を離れ、県外の音楽に強い専門学校に進学した。無論、不安も多かったさ。けど、それ以上に寮での一人暮らしや、自分の夢を叶えるための勉強を楽しんでいたと思う。あとは、俺のことを顎で使う姉貴から解放されたのも嬉しかったっけ。

　寮で一人暮らしをしてるんだから、当然自炊もしなきゃならない。寮に越してきてから一週間あまりが過ぎて、そろそろカップ麺とコンビニ飯の生活に漠然とした危機感も感じてきた。だから、母に押し付けられたレシピ本を片手にデパートに出掛けたんだ。

　とりあいず、適当に値引きシールのくっ付いた食材をカゴいっぱいに詰めて、長蛇の列に並んでいた。

　近頃、デパートではレジのセルフ化が進んでいる。俺がこれからお世話になるデパートもその例に漏れず、しかも前の方じゃそういうのに慣れて無さそうな婆さんが危うい手つきでタッチパネルと格闘していた。

「こりゃ、長引きそうだな……」

　列を変えようと、ふと視線を外した。

　そこで、俺は我が目を疑う。

「あっ……」

　思わず声が漏れた。しかし、それは当然のリアクションなのだろう。一つ向こうの列、そこに並んでいた彼女は俺のよく知る人物だったのだから。

　さん。

　黒いストレートの髪に、丸っこい瞳。高校を卒業してメイクを覚えたせいか、垢抜けた印象を抱いたが見間違える訳がない。彼女は高校での数少ない女友達だ。

「篠崎さ、」

　俺は彼女に声を掛けようとした。しかし、列はまるで測ったように進み出す。後ろのおばちゃんに睨まれながら、俺もそそくさと列を進んだ。

　結局、彼女には声を掛かれず終い。彼女の姿も買った食材をレジ袋に包んでいるうちに見失ってしまった訳だ。

　それから、篠崎さんが女友達というのも語弊があったかもしれない。というか、ハッキリ言ってしまえば彼女は女友達というより、俺が高校で三年間片思いし続けた相手だった。ラインを交換した程度の関係で、クラスのグループ行動でたまに話すくらいの仲だ。

　ただ、当時の俺はこの偶然に運命的なものを感じていた。人知れず、諦めた恋。そんな相手にこうやって再会できただけでも奇跡に近い。だから唯一繋がっているラインでこんな風なメッセージを送ったと思うんだ。

〈やぁ、篠崎さん。久しぶり〉

〈篠崎さんも、県外に進学したんだね。そっちは気づかなかったと思うけど、今日デパートで見かけたよ〉

〈そっちも、この辺りで一人暮らしをしてるのかな？　ならさ、情報とか交換し合おうよ！　お互いはじめての一人暮らし、分かんないことも多いだろうしさ〉

　何せ、五年前の頃の記憶だ。細部に語弊はあるだろうが、今にして思えば、連絡を取り合おうという下心見え見えのラインを送ったと思う。

　だが、彼女から返事は当時の俺の予想に反するものだった。

〈えっと……石原くん？　ちょっと言ってる意味がわかんないな。私、県外にも出てないし、実家暮らしだよ？〉

　一時間程度。俺は彼女からの返信にまたも、我が目を疑った。

〈えっ……いや、〉

〈たしかに、俺は見たんだけどな。ちょうど、隣のレジに並んでるとこを〉

〈多分、人違いだと思うよ〉

〈それに私、今髪染めてるし。多分、石原くんじゃ、私を見てもわかんないじゃないかな？〉

　確か、そんなやり取りをしたと思う。

　篠崎さんはそう言っているが、俺は自分が見間違えたとも思えなかった。三年間、陰ながら恋焦がれた相手だ。そう簡単に間違えてたまるか。

　しかし、本人がそう言ってるのだから間違えはないのだろう。それに思い返せば、彼女は地元から離れるつもりがないと公言していた。

　そんな風なモヤモヤにも近い消化不良を抱えたまま、学校の階段を登っていた時だ。すれ違い様に、彼女の丸っこい目を見つけた。

　ほんの一瞬だが、間違えはない。

「篠崎さっ、」

　俺が声を掛けようとした時には、彼女の姿は階段の陰に消えていた。けれど、今すれ違った彼女は髪にカラーが入っていた。たしかに、黒い髪に掛かった金のグラデーションは、高校の頃の彼女の印象をガラリと変えていて、事前にそのことを知らなければ彼女が誰か分からなかったかも知れない。

〈やっぱり、篠崎さん。こっちに来てるよね？　というか、同じ学校じゃん！〉

　俺は授業もそっちのけで、机の下にスマホを隠しながらラインを送った。居ても立っても居られなかったのだろう。

　今度は思ったよりも早く、返信が返ってきた。しかし、その内容はまたしても俺の期待を裏切るようなもの。

〈えっ……何？〉

〈私、地元にいるって言ったよね？　……冗談だとしても、気持ち悪いよ？〉

　そんな返信に、俺は少しカチンと来た。そこから、「見た」と「人違い」の言い合い。最後は半ば、喧嘩のような雰囲気で彼女の返信が返ってこなくなった。

「……いや、あれは絶対篠崎さんだろ。……他人の空似にしたって似過ぎてる」

　彼女の丸っこい瞳は特徴的だ。それを見間違える訳がない。

〈ねぇ、篠崎さん。どうして、嘘を吐くんだよ？〉

　返信はなし。

　どうやら、俺は完全に嫌われてしまったらしい。連絡先もブロックされてしまったようだ。

　それから、これは後から知った話だが、地元では当時、俺が篠崎さんのストーカー化したと話題になっていたそうだ。

まぁ……正直、そんなふうに言われたって、おかしくはない。俺も当時の自分を思い返してみて、恥ずかしくなる。

　ただ、俺はそれからも自分の身の周りで篠崎さんとすれ違い続けた。

　友達と騒いでいたカラオケ店の廊下で。

　バイト先のファストフード店で来客として。

　果ては、女子禁制の寮内でまで。

　俺はその度に、直接彼女に問いただそうとした。しかし、いつも彼女を見失ってしまう。何かそういう力が働いているのではないかと、思うほどに出来すぎたタイミングで邪魔が入るのだ。

　ただ、そんなことが一年、二年と続いているうちにいい加減自分の中でも、一つの答えが出た。彼女は篠崎さんのそっくりさんだと。

　学年が上がるにつれ課題も増えてきて。有望な後輩が入ってきたり、同級生が結果を出していたりするうちに、俺は焦燥感に駆られた。だから、もうそっくりさんを気にする余裕も無くなっていた。

　三年の終わり頃に、彼女は俺の目と鼻の先。それこそ、無理矢理にでも話ができる距離に近づいていたのかも知れないし、そうじゃないかもしれない。ただ、そんなことを考える余裕が当時の俺にはなかったんだ。

　そんな折、高校で特に仲が良かったからクラス会の誘いがあった。なんでこの忙しい時期にとも思うが、俺の地元の連中はそんな奴ばっかだ。当時のクラスメイトはほとんどが地元に残っているし、一人が実家の居酒屋を継いだらしい。

　飯島は俺にも誘いをくれた。

　ただ、さっきも言った通り、当時の俺は焦っていた。それにクラス会となれば篠崎さんとも顔を合わすことになるだろう。それがどうにも気まずくて、誘いを断ったんだ。

　すると飯島は数日後、頼んでいないのに俺にクラス会の様子を報告したいと電話を掛けてきやがった。

〈よっ！　！〉

「んだよ……俺、最近忙しいんだけど……」

　俺は自室で、提出しなければならない課題に向き合っていたと思う。

〈まぁ、そう言うなって。数年ぶりにちょっとくらい親友に付き合ってくれてもいいじゃねぇか〉

　因みに、俺が篠崎さんのストーカー化していると言う話はこの時聞いた。飯島は何というか、そういう奴なんだ。人当たりも良いし、誰とでも仲がいい。ただ、ちょっと空気が読めないというか……

　ただ、そんな親友との積もる話は楽しかった。

　数時間ほど、互いのことを駄弁って、懐かしさに浸り、心にも少しの余裕が出来たと思う。飯島がその話題を持ってくるまで。

〈それからさ、お前は県外に行ったから知らねぇと思うけどさ……シンデレラが死んだって〉

　それまで、笑い混じりに話していた飯島の口調がこの時だけは重苦しいものに変わった。

　シンデレラが死んだ。

　シンデレラというのは、うちのクラスメイトの一人に付けられたあだ名だ。彼女の本名は。シンデレラなんて大層なあだ名を付けられたのだから、お姫様のような美少女をイメージするかもしれない。

　しかし、富野はその真逆だった。髪はいつもボサボサで風呂に入ってるのかもわからない。細い目は陰湿そうで、お世辞にも可愛いとは言えないようなブスだった。

　あだ名の由来だって、一部の生徒が彼女の靴を隠して虐めている様子を誰かが皮肉混じりにシンデレラと呼んだのが始まりだ。

「は……？　あの、シンデレラ死んだのかよ！？」

　俺は少なからず、驚いてしまった。

　というのも、俺は富野と少しばかりの交流があったからだ。

　彼女に対する虐めはどれも、傍目から見て心地良いものじゃなかった。悪口陰口は当たり前。それを必死に堪える彼女に俺は少なからず同情を覚えたのだろう。

　一度だけ、俺は彼女の靴を探してやったことがあったんだ。

　彼女の靴の中には、技術室からくすねてきたのか、釘がぎっしりと詰められていた。俺はこんなことをする連中にドン引きしながら、釘は技術室に戻して、靴も富野に返してやった。

　まぁ、助けたのはその一度だけ。あとは卒業まで見て見ぬふりをした。正義感よりも、若気の至や、ちょっと格好付けた真似をして自己肯定をしたかっただけのことだ。

〈シンデレラさ……もう高三の最後の頃は学校にもこなくなったじゃん。んで留年したのはお前も覚えてるだろ？〉

「あぁ、まぁ……」

〈春頃だったかな……駅のホームに飛び込んだらしいぜ。……ちょうど、そこに現場に居合わせた奴も何人かいるって言ってたけどさ……顔がぐちゃぐちゃになったって言ってたぜ。数メートルは引き摺られて、誰かわかんねぇくらいにさ〉

　時刻は夜の十一時過ぎ。辺りはしんと静間に返っている。

　さっきまで馬鹿話で盛り上がっていたというのに、飯島はなぜ最後にこんな話をするのか。俺は思わず、路線に飛び散った肉片と、血まみれになった富野の姿を想像し、吐きそうになってしまった。

「なんで最後にそんな話すんだよ？」

　すると、飯島はすこし間を置いて、

〈アイツ……お前のこと、好きだったらしいから〉

「……は？」

〈お前、アイツのこと一回助けたらしいんじゃんか。シンデレラが自殺したこと、お前はちょうど県外に行っちまったし……何つーかさ。好きな相手が、自分の死んだことに気付いてくれないってのも可哀想だなと思ってさ……というか、虐めに直接関わっていなかったとはいえ、シンデレラってあだ名で呼び続ける俺らも酷いよな……はは〉

　電話越しに乾いた笑い声が聞こえた。

　そのまま気まずい雰囲気のまま、飯島との電話を終えた。

　俺の中に、言葉にできない感情が広まっていく。多分、それは八割近くが同情で、残り二割は助けられたかった罪悪感だ。しかし、そんな気持ちも数日経てば忘れてしまうのだろう。

　所詮はその程度の仲。今は自分が不安に押しつぶされそうだってのに、高校の好きでもない女子が自殺していたというニュースを聞かされても構っている余裕はなかった。

　時計を見れば、あと十分程度で日を跨ぐ。しかし、机の上には投げっぱなしの課題が真っ白なまま放置されていた。

「……はぁ、やるか」

　最悪な気分だが、やるしかない。そう気持ちを整えて、席に向かった時だ。

　呼び鈴が鳴った。

　ピンポン、という電子音が備え付けのインターホンから再生される。

　──は？

　嫌な困惑が、俺の中にじんわりと広がる。

　寮長だって、すでに仕事を終えて返っているはず。こんな時間に寮の一室を訪ねる人間がいるわけもない。そもそも、この寮はオートロックで……しかし、俺が頭で理屈を捏ねくり回していても、インターホンは一定の周期をおいて繰り返される。

　そして、ドアカメラが撮影した映像には、篠崎さんの姿が映し出されて……いや、違う。

　カメラ越しの彼女の顔が少しずつ、崩れ始めた。

　金のグラデーションがかった髪は抜け落ち、丸っこい瞳のくっついた顔の肉がズリズリと剥がれ落ちてゆく。

「石原くん！　久しぶりだね！！」

　ドアを一枚挟んだ向こうで軽快な声がする。しかし、その声は篠崎さんのものではなく、富野の声だ。

「開けてよ、石原くん！　課題に困ってるんでしょ？　昔助けてくれた時みたいに、今度は私が手伝ってあげるからさ！」

　やがて、彼女はドアを叩き始めた。丁寧なノックも次第に乱暴なものへ変わっていく。もうノックというより、ドアを殴りつけていると言った方が正しかった。

　彼女が身体を大きく動かせば、その度顔の肉が剥がれていって、やがて骨が見えた。電車に引き摺られ、剥き出しになった富野の顔だ。

「ねぇ！！　ねぇってば！！　私ね、私ね、とっても可愛くなったんだよ！！　石原くんが好きだった、篠崎さんみたいに！！」

　全身の毛穴から汗が噴き出す。

　恐怖で喉の奥が窄み、声を出すことも出来なかい、

　俺は彼女の形相が映し出されるインターホンのモニターから視線を外すと、無我夢中でドアへ飛びつく。

　薄いドアは、いつ破られてもおかしくなかった。

「開けてッッ！！　開けてッッ！！」

　ノブが激しく回され、衝撃も伝わる。恐らくは体当たりもしているだろう。肉の塊が地面に落ちるような音は、俺の鼓膜を通して、恐怖を全身に伝播させる。

　震えで、とてもじゃないが力なんて入らなかった。噛み合わない歯が喧しい。

　それでも、このドア開けちゃならないことだけは、ハッキリとわかる。

「開けてよぉぉぉおおおおおおおおおお！！！！　魔法が切れちゃうよぉぉぉぉおおおおおおおお！！」

　その叫び声が恐怖の臨界点だった。

「うわぁぁぁぁぁ！！！！」

　腹の底というより、地獄の底から響いてきたような咆哮に、俺は耐えられず、そのまま玄関から飛び退いた。

　情けなく、廊下は這いずって、逃げ場もないと分かっているのに部屋の奥へと駆け込んで、震えていたと思う。

　しかし、音はピタリと止んだ。

　あの叫び声も、彼女の気配も嘘のように消えてしまった。モニター画面もいつの間にやら切れている。

　ふと、俺は何故か冷静になり、彼女の最後の叫びにあった魔法という言葉が気になった。

　恐る恐る時計を確認すれば、時計の針はちょうど十二時を指している。ドアを開けて、外の様子を確認する勇気はなかった。顔がぐちゃぐちゃになった富野はもちろん恐ろしい。しかし、それ以上にシンデレラのお話通り、彼女の靴がドアの向こうに残されていたらと思うと、恐怖で身体が動かなかったのだ。

　さて。

　この恐怖体験が俺にシンデレラという御伽噺にトラウマを持ってしまった原因だ。当時の俺はこんな話、誰に言っても信じてもらえず、ノイローゼ気味に。結局、学校も途中で辞めてしまった。

　けれど、地元に戻ったお陰で多少精神は回復した。それからは特におかしなことも起きず、就職も出来たわけだし、その職場でいい関係になった女性もいる。俺の人生はそれなりに順調だ。

　今でもシンデレラという言葉を聞けば鳥肌は立つが、日常生活でそう多く耳にする言葉でもないだろう。

　それに俺は御伽噺に出て来る王子様じゃないのだから、ガラスの靴を手に、この恐ろしいシンデレラを探そうとも思わない。俺への想いで霊と化したのか、それとも虐めている自分を気まぐれで助けただけの俺へ恨みを抱いているのか、それも正直わからない。

　ただ、この体験をこうやって人に話したりできる程度には、トラウマも和らいでいるのだろう。いつか、恐怖を完全に忘れて、笑い話にするための、一つのリハビリみたいなもんだ。

　たださ……ここまで俺の話を聞いてくれたんだ。

　最後に一つだけ、少しだけ相談に乗ってくれないか？

　ついこの間、俺が通勤のために駅のホームでぼっーと突っ立ってるとき、反対のホームに俺の彼女が立っていたんだ。彼女は俺と同じ職場の人間。この時間に反対のホームに立っている訳がない。

　俺は彼女に手を振ろうとしたんだ。

　けれど、ちょうど測ったようなタイミングで電車がホームに滑り込んできた。結局、向こうのホームに立っていた彼女そっくりのアイツは何だったのか、分からず終い。

　相談っていうのはさ……このことなんだよ。

　もし彼女にこの件を聞いて、篠崎さんの時のように知らないと言われたら、どうするか？

　嫌でも考えてしまうんだ。俺の隣の彼女の顔がふとした時に、崩れ始めたら。また肉がずり落ちて、骨だけが剥き出しになってしまったら。

　なぁ、誰かこういう時、どうしたらいいか？　知ってたりしないか？